

おいでよ！鹿島

ムサシアブミ

低地の照葉樹林内に生えるサトイモ科の多年草。クスノキ林内に点在。3枚に分かれた大きな葉とヘビの鎌首のような花が特徴。花期は3〜5月。秋には真っ赤な果実が実る。和名は花の形を鐙（あぶみ）（馬の鞍（くら）に垂らして足をかけるもの）に例えたもの。有毒。



しモンエゴマ

イシカグマ

暖地に生えるシダ植物。シカが食べない植物のため鹿島ではクスノキ林内に群生しているが、鹿島以外では比較的稀。葉は2回羽状に分裂し、秋には葉の端に小さな胞子がつく。和名は「石のごろごろした所に生えているシダ」の意味らしい。



ハッコウアザミ

キク科の一年草。熱帯アメリカ原産の外来種で、愛媛県ではかなり珍しい植物だが、鹿島ではシカが食べない植物のため、あちこちで群生している。夏から秋にフサフサした白い花を多数つける。



クスドイゲズキンヨコバイ

鹿島で発見されて新種となった体長が4mm前後のヨコバイ科の昆虫。体色は茶褐色でオスは黒みを帯び、メスは前羽に白色の斑紋がある。セミを小さくした姿をしており、セミと同様に口吻をクスドイゲ（海岸に生える樹木）に刺して汁を吸う。「横這」とは警戒した時に横にずれながら歩くことから。



イソヒヨドリ

とても美しい声で鳴き、オスは頭から胸、背中にかけて深い青色をしている。消波ブロックや防波堤に止まり、あまり動かずじっとしていることが多い。



ナンゴクウラシマソウ

暖地の照葉樹林内に生えるサトイモ科の多年草。クスノキ林内に点在している。葉は13〜15枚に分かれて扇型に広がる。花期は4〜5月。花は暗紫色で、その中から花の一部が突き出て高く伸び上がり、さらに先は垂れ下がる。これを浦島太郎が持っている釣り竿に例えて浦島草という。有毒。



クスノキ

暖地に多い常緑高木で、古い時代に中国大陸から渡来した。鹿島でもっとも多い樹木。葉を揉むと特有のいい香りがする。長命な木で神社などには巨木が見られる。材から防虫剤となる樟脳（しょうのう）が採れるので植林もされていた。

フナムシ

ムシの名が付くが昆虫ではなく、分類上はエビやカニと同じ甲殻類でダンゴムシに近縁。磯の岩場や防波堤で普通に見られるが、驚くと逃げ足は速い。ただし泳ぐのは苦手で水中に長時間いると溺れてしまう。藻や生物の死骸を食べる「磯の掃除役」。英名はwharf roach（埠頭のゴキブリ）。



タワヤモリ

日本固有のヤモリで、松山市のレッドデータブックに絶滅危惧種として掲載されている。鹿島では夜間に遊歩道を歩くと柵の上などによく見かける。家屋に居るヤモリはニホンヤモリで平安時代以降に大陸から渡来した外来種と考えられている。ニホンヤモリとは背面に大型の粒状の鱗（うろこ）がないことなどで区別できる。

アオスジアゲハ

幼虫の食樹はクスノキなどクスノキ科植物であることから、鹿島では初夏から秋にかけてアオスジアゲハを頻繁に見ることができる。アゲハチョウの仲間、羽は黒地に青緑色の縦模様が特徴。普段はすばしこく飛び回るが、水辺で吸水する時はじっとしているので観察しやすい。



ムラサキツバメ

暖地の照葉樹林にすむシジミチョウの仲間。羽を広げると長さ35〜40mmで、後羽には尾状の突起がある。オスは全体が深い紫色に輝き、メスは黒地の中に鮮やかな青紫色が輝く。幼虫の食樹はマテバシイやシリブカガシ。幼虫は体からアリの好む液体を分泌し、アリはそれを得る代わりに幼虫を守ると共生関係が知られている。



ハマヒョウタンゴミムシダマシ

海岸性の体長4〜5mmほどの小さな甲虫。砂浜に漂着した流木や海藻などの下に生息し、腐植物を食べる。ヒョウタンのようにくびれた白っぽい体に黒褐色の十字架模様が入りきれいな虫だが、砂浜では見事な保護色となり、動かないと見つけにくい。



シカ

鹿島のシカはニホンジカで、体が小さく警戒心が強く人に慣れにくい。オスに毎年、春から夏にかけては柔らかい袋角が生え、秋に袋がはげ落ちて硬い角に代わる。現在、野生シカによる希少植物等の被食防止のため、鹿島のシカは、鹿園で全頭保護されている。



アオサギ

サギの仲間では最も大型。鹿島では登山口から少し登った所によく営巣している。釣り人から魚を横取りしようと防波堤のあたりにいることが多い。繁殖期にはくちばしが鮮やかなオレンジ色になる。



× 通行止め